

多摩区制 50 周年記念公募事業



パネル展示 登戸研究所の歴史と

地域の歴史を振り返り、未来を見据える

2022年8月8日(月)～16日(火)

多摩区役所 1階アトリウム

◆ 登戸研究所資料館の協力で、今年3月26日まで資料館企画展で展示された「参謀本部と登戸研究所による対中国謀略」を初めて館外で展示します。

◆ 戦争中、秘密にされた登戸研究所を支えていたのは
地元の若者たち

2020年に登戸に住む会津さんが、本土決戦用の手りゅう弾と思われる手のひらサイズの鋳物を登戸研究所で造っていたことが、タウンニュース(2020年9月25日)で初めて語られました。

下の写真は、登戸国民学校(現登戸小学校)の男子児童51人が勤労動員され登戸研究所で働いていたときのもの



資料館作成の展示会のチラシ



「空襲免れた軍事施設」

登戸研究所 元勤務員 会津友伺さん

川崎市登戸国民学校の、現在の登戸小の校舎前で1944(昭和19)年春ごろ撮影されたという一枚の集合写真。学徒動員で登戸研究所勤務を命じられた約40人の学校に、登戸在住の会津友伺さん(89)はいた。「一箇、ゲートルを自分で足に巻いたんだ。兵隊と同じように仕事の手を足を守るため」と回顧する。配属は10種以上ある建物の間にあった機銃部。手りゅう弾のような鋳物を作る作業の補助だ。約50センチ四方の木製の箱に手りゅう弾を詰め、中央に木製の球を入れて固める。日光で3週間ほど干したら球を外し、箱を2つ合わせて施錠。あとは職員が運んだ鉄箱に詰め込み、箱を機銃部から鉄の球を取り出すという工程だ。「職員は手りゅう弾とは一言も言わなかった。面倒な作業だったけれども、言われたとおり毎日やるしかなかった。会津さんは幼少時に卒業し、そのまま研究所に当時最年少で採用。同級生で同じ増進は、6人だったと推測する。ある日、30機ほどの米機が低空飛行で迫ってきた。慌てて職員と防空隊に逃げたが、空襲せず通り過ぎたことが記憶に残る。「登戸研究所は軍事施設だが、大したものではなかった。研究所で働いたのは約1年半。出張を経て終戦前日に帰宅した。『研究所に国の大事なお金を使っている、本当に申し訳ない』

戦争は「始めなければよかった。もっと早くやめさせればよかった」と会津さん。戦後75年を迎え、「天啓がなくなった悲愴な戦争の事を、現代に知らせたくない」といけな一と力を込めた。学徒動員の児童ら、職員2人(前列中央)の向かって右端が会津さん(本人提供)



直径10メートルの和紙で造った風船爆弾

主催 登戸研究所保存の会

連絡先 森田忠正 090-2221-4852

協力 明治大学平和教育登戸研究所資料館